特別インタビュー

三波春夫さん 五輪・故郷への想い。

――娘・美夕紀さんに聞く

三波美夕紀さん

前回（1964年）の東京五輪テーマソング「東京五輪音頭」を歌った長岡（越路）出身の国民的歌手・三波春夫さん。その晩年の11年間、マネジャーを務めた長女・美夕紀（みゆき）さん（三波クリエイツ代表）に、三波さんの五輪や故郷への想いを聞きました。

―前回の東京五輪、三波さんの歌声は日本人を勇気づけました。

「戦後、日本が頑張って復興した姿を世界に見ていただく初の大イベントなのだと、成功を願って懸命に歌いました。『戦場で戦い、シベリアで捕虜（ほりょ）にもなった自分は、亡くなった戦友の分まで力一杯歌うのだ』と。結果、大ヒットとなって、大勢の皆様に愛されて踊っていただいたことは、生涯の宝物の出来事だったと言っていました」。

―故郷の越路地域には顕彰碑が立ち、今でも慕う声が多いです。

「自分が生まれ育った風景の中に今も立つ姿となって、本人もありがたいと思っていることでしょう。晩年にCD4枚組の大作『平家物語』を作ったときも、物語が新潟の各地にゆかりを持つことをとても喜びながら台本を書いていました。故郷への思いは、生涯尽きることがない様子でした」。

故郷の塚野山に立つ顕彰碑

東京五輪のお別れパーティーで（昭和39年10月、新宿御苑）

「お客様は神様です」の本当の意味

―三波さんと言えば「お客様は神様です」の言葉でも有名です。

「今では、お客様を神様のように思って対応するというような意味で広まっていますが、本当はそうではなく『歌う時には、神前で手を合わせるときのように雑念を払い、澄み切った心で歌わなければ完璧な歌は歌えないのです。ですから、私はお客様を神様と見て歌を歌います』という、歌手としての心構えを言ったものなのです」。

2020年へ、もし、三波春夫さんがいたら

―2020年の東京五輪が目前です。

「長岡市が火焔型土器の聖火台採用を目指していらっしゃるとお聞きしました。ぜひ長岡の誇りを聖火台にと、三波もきっと願ったでしょう。今度の五輪については、もし三波が生きていましたら、特に子どもたちに『世界の中の日本をよくよく見詰めてみましょう』と言ったのではないでしょうか。そして、また五輪音頭を心を込めて歌うと思います」。

三波春夫さん（1923-2001）
代表曲は「チャンチキおけさ」、「船方さんよ」、大阪万博のテーマソング「世界の国からこんにちは」、長編歌謡浪曲「元禄名槍譜　俵星玄蕃」ほか多数。
（昭和34年３月、塚野山で）

NAGAOKA News

市政の最近のできごとを紹介します。

官民で海外留学を支援

官民協働で人材育成を目指す「長岡グローカル人材育成事業」で学生７人が海外留学をします。市内企業のインターンシップで各自の課題を整理後、タイやイギリスなど６カ国で３～６カ月間の研究に取り組みます。（７月30日）

戊辰150年、会津と深い絆

奥羽越列藩同盟として戊辰戦争を共に戦った歴史的な縁から、福島県会津若松市の中学生大使33人が長岡を訪れました。南中学校との交流では、まちの歴史や文化などを発表。両市の先人の想いを学び、絆を深めました。（８月８日）

"起業"を目指し、まちなかで調査

NaDeC（ナデック） BASE（ベース）で、起業の基礎知識を学ぶ長岡大学の「起業家塾」を開催し、３大学１高専の学生25人が参加。ビジネスプラン策定に向けて長岡駅前でマーケティング調査を行うなど、起業のヒントを探っていました。（８月21日）

異業種連携で、課題解決

ＩＴなどの新技術で介護・ものづくりの現場の課題解決に取り組む「イノベーション・ハブ」を立ち上げました。企業や大学など異業種が異なる視点、自由な発想でアイデアをカタチにしていき、実現を目指します。（７月20日）

震災の記憶を伝え、50万人達成

中越大震災の記録・記憶を伝える「中越メモリアル回廊」が来館者50万人を達成。研修で訪れた教員のひとりは「ここで学んだことを、子どもたちの安心につなげていきたい」と語っていました。（７月30日）

長岡の防災・救急を姉妹都市が評価

姉妹都市・米ホノルル市のアメミヤ副市長が、まちの防災や救急医療の体制を学ぼうと、消防本部などを視察。緊急搬送時、多言語対応できる端末の説明を受け、長岡の災害・救急対応の細やかさに感心していました。（８月３日）